

聖書に、あなたがたのうち誰が、百匹の羊のうち一匹を見失ったとき、九十九匹を野に置き、消えた一匹を探さない者があるか、というイエスの言葉がある。この比喻を用いれば、九十九匹を救うのが政治であり、見失われた一匹を救うのが文学である。だが、従来の政治は少数の責任しか負わず、文学は多数派の代弁者に堕してしまつた。さらに、現代は個人が社会正義の名の下に抑圧され、行き場を失い、その結果利己心を剥き出しにして醜悪な闘争を繰り返している時代である。この状況において、個人が私心と野望を捨てて社会意識をもてばよいとするのは空想に過ぎないし、個人の名において社会を全否定するのも反動でしかない。社会と個人を対立図式で捉えるのではなく、政治と文学の一致、社会と個人の融合を理想として目指すべきあり、その理想を実現するためにこそ、それぞれ両者を截然と区別し、各々の本分を全うする必要がある。

著者はこのように述べているが、私が注目したのは、著者が「政治の限界を承知のうへで」議論を展開している点だ。どれほど善き政治でも最後の「一匹は救えない」という認識が主張の起点になっている。私たちはともすると百匹すべてを政治に救ってほしいと願ってしまう。だが、そうした発想はファシズム願望と紙一重だ。社会は価値観も生活環境も異なる多様な人間が共存する場であ

り、そこですべての人間を救えと政治に要求してしまうと、戦時下で個人の自由と権利が多数派に支配されたように、かえって個人と社会の対立を深めることになりかねない。

一方、文学の力にも限界はある。著者は、共産主義思想に基づいたプロレタリア文学が一九三〇年代に壊滅し、その後日本が戦争に向かつていった過程を見てこの文章を書いたと思われるが、生活に苦しむ大勢の人々を救うという、本来政治が担うべき負荷を文学が引き受けるには荷が重すぎるし、それはそもそも文学本来の役割ではない。文学と政治は截然と区別され、各々の役割を果たしながら補完し合うことが、社会と個人の一体性を支えるのである。

さらに、不慮の事故や災害などにより、私たちは誰もが九十九匹の側から外れて「失せたる一匹」になる可能性を有している。自分が「その一匹」だという想像力は、文学者だけのものではない。個人もその想像力をもつことが、社会との対立を乗り越え、つながりを作る重要な鍵になると考える。